れる清楚でたおやかな「をとめ」の姿容も、勇猛果敢な「ますらを」の躍動、「素朴で実直な性的恍惚の世界」[7]も、歌謡から万葉に至るまでに形成されてきた言語空間の〈明るさ〉を喪失し、それらは「世間」とよばれるとどまることをしらない輪廻する苦海の一景（生苦）へと暗転する。「をとめ」の遊びも「ますらを」の妻まぎも、すべてが流転する苦海の一点描でしかないように映じてくるのである。「哀世間難住歌」は均質的な集団の言語空間によって〈うた〉として支えられながら、逆にそれらの言語空間を〈生苦〉の「世間」へと顚倒させるところで、あらたな〈表現〉の内部風景（難住）をかくとくしたと考えられる。

注1　中西進氏「嘉摩三郎作」『山上憶良』
2　高木市之助氏「語彙の論」『貧窮問答歌の論』。林勉氏「山上憶良の言葉」『万葉集を学ぶ』第4集
3　高木市之助氏「短歌の古代性」『高木市之助全集』第6巻。鈴木日出男氏「万葉詩の成立――和歌形式の成立」「解釈と鑑賞」第45巻2月号
4　このあたりについては、下田忠氏の論（「憶良長歌の表現構造――『哀世間難住歌』の場合」「上代文学」第44号）に詳しい。
5　「渇愛――憶良『思子等歌』についての一考察――」上代文学会大会昭和57年5月
6　井村哲夫氏「令反或情歌と哀世間難住歌」『憶良と虫麻呂』。氏は別に「財尽きて行乞すれば人喜ばず。年過ぎて背を傴め手に杖を取れば、雹に折れたる樹の如く人の愛するなし。是の如く畏るべきは衰老の法なり…」（仏本行集経、空声勧厭品）を挙げられている。
7　注4に同じ

「哀世間難住歌」をめぐって　発表・討議総括

過去六年間のセミナー・シリーズ活動の総括と新たなる視座を求めて打ち出された〈表現史〉として、憶良の当面歌は漢詩文と出会った歌の問題―漢詩文と出会うことで歌がどのような表現の位相を示したかということであった。〈表現史〉とは何かについては森朝男の総括に述べられるはずである。過去の運動の評価と反省に立ったものであるだけに、〈発生論〉・〈様式論〉・〈制度論〉の問題が改めて検証されることとなったが、当該討論に於ては、〈制度論〉は表現に行きつかないのではないかという疑義が出されていた（昨夏セミナーでの古橋信孝の発言）にもかかわらず、立論者の中でそのあたりが明確にされぬまゝ、制度論的視点をもち込むことが〈表現史〉であるかのごとく扱われた嫌いがあったことは特に見逃し難い問題として残されたように思える。

＊

辰巳正明の立論は主題としての老という問題と歌の構成力の面から成されている。先行する題によって歌は抽象化・論理化を要請され統括される表現を可能とするようになるが、それは中国文学の〈論〉の構成法に拠るものだとする。最も重要な問題点は、そのことの歌における意味についてであった。論理性によって支えられた構成法というのは〈歌〉にとって何であったのか、換言すれば、何故〈歌〉なのかという丸山隆司の質問にセミナーの場で辰巳は答え

ていない。斎藤英喜のその表現史的意味はという問には表現領域を広げたのだ（歌の主題の拡大と換言して森に支持されている）とだけしか答えていないが、長歌とは何であったのかという問題が抜け落ちているという古橋の指摘と合わせて、十分ではないが「雑歌性」という所で、辰巳はその問題を抱えようとしているように見える。伝統的には寿老であった老を主題とする歌は、律令制度の中で老が保証されることによって寿老の前提としてあったはずの老苦を逆出させてくる。それは晴がましいものとしてあった雑歌（宮廷に掬いとられる歌）が、仏教思想や漢詩文（嘆老は六朝詩文に見られる）によって宮廷に掬い上げられない雑歌（文選の雑詩に相当、当面歌がそれである）を逆出可能にするのとパラレルである。この逆出は律令即ち儒教の二面性の問題であるとして、辰巳は制度論的に当面歌を捉えるかに見える。それは右に掲げた要旨では割愛された「内省」という問題としても出された。当面歌の「老」は現実非現実の二面性をもつものだと「内省」を律令（儒教）の二面性に対応させて制度論的に憶良を捉えようとするのは辰巳なりの作歌論からの脱脚を意図しているのだが、作歌論的まなざしは払拭しきれず（例えば逆出させられた雑歌性とは歌の表現として具体的に何をさすのかという吉田修作の問に嘆きの質といい、そのように向かってしまう憶良の内面としか答えていない）憶良の作品全体の顧慮により当面歌そのものより憶良の問題へと向かってしまう（比較文学的立場の辰巳にとって、作品出典論からの脱出もからんでの難問への取り組みではあるが、内面という点については憶良のみが悲劇であるかの如き取扱いと古橋の鋭い批判を受けている）。しかしこの制度論的視点による〈表現史〉への意図は内省の二面性を表現に内在する対立と捉えて虚構とのかかわりに於て当面歌の水準を問う西条勉の発言を引き出し、〈表現史〉と〈表現〉の問題として据えられる。表現の価値を一貫して執拗に追究する斎藤は和歌に付された序文の意義を問うが、辰巳は序があるのが当然なのだという中国文学の側でしか答えていない。また、宮廷に向かわないということについて前提としての官人集団は否定できないのではないかという斎藤の疑問は、辰巳の〈制度〉なるものを問うことでもあった。いずれも重要な指摘であったが時間切れで十分な討議が成されなかった。

＊

東茂美の立論は、歌の構成と類歌表現・漢文序が歌に及ぼす意味という点で成された。類歌表現（をとめ・ますらをの姿）＝集団性共有性の造型する言語空間が、逆説の文脈と漢文序の概念語（八大辛苦）によって顕倒させられ〈生苦〉の世相という内部風景を確保したのが表現史上の意味であるとする。討論の多くは、東の提示する「読み」が果して可能であるかという点に費された。逆説の文脈と確定できるかという三浦佑之、A逆説Bが承認されたとしてもBによってAは変貌せず、AとBの対比という歌謡から一貫してある嘆老歌の表現構造を出ていないという猪股ときわ・保坂達雄・丸山をはじめ多くの参加者の不満は解消されたわけではないが東の主意は斎藤に受け止められ評価された漢文序の力という点にあった。和語では表現出来にくい観念的思弁的世界を歌と漢文序を一括した作品とすることで序文の漢語につり上げられて表現としては他と変わらぬ歌のことばが漢語のもつ観念を表現し得たことになるという。ここでも相変らず細部に於ける疑義（漢文序の語と対応する歌の部分などについて三浦・高野正美より出された）が残り、作品分析の不備（保坂の指摘）は否めないが、類歌への顧慮は歌が可能とする表現（これを東は制度

と言い、様式との違いが明らかにされていない）の問題と憶良を孤立的作家として扱わない意図があったし、漢文序の重視は斎藤の評価の如き〈表現史〉に向かおうとした試みであった。討議されるべき問題は、逆説の文脈による語の意味の持たされる陰影（と受け止めて）という点は〈作品論〉的読みの問題でありそのまゝでは〈表現史〉にはなり得ていないという森の指摘による〈作品論〉と〈表現史〉の問題、序文の語によって和歌のことばに漢語の観念が付着されたとしても歌そのものの表現は変わっていないということは、嘆きが歌われていないという古橋の指摘も含めて、〈うた〉の問題としてどう捉えるかという点であったが時間切れで残されてしまった。

漢詩文と出会った歌という当テーマの討議を今思い起こし、中国文学に出会ったというよりはひきずられた歌という印象を残した。題に先行される歌、主題の拡大ということは表現としての嘆きの質の問題をひき出した。辰巳は「嘆老」と言うが、人生の無常を詠うのが六朝詩人の一般だという呉哲男の指摘もあった。従来の嘆老とは異なる〈生苦〉なのだ、と東は言う。いずれも漢詩文あるいは漢語によって導入された観念が「嘆き」の色合いを変えていることを問題にしようとしたものだ。発表者が共に比較文学的立場に拠って、一貫した〈うた〉への顧慮に欠け、〈うた〉の〈表現史〉へ帰着しにくかった憾みが残ったのは企画上の難点であったが、比較文学の今後という問題もからんで発表者たちが苦慮したことの意義は大きい。漢文学の影響を否定できない日本のことばの問題としてこのテーマは〈表現史〉に欠くことの出来ないものなのだから。

（野田浩子）

6号（昭和四十一年十二月二十日発行）

しきたへ……賀古　明
万葉集における七夕歌……針原　孝之
上総国防人歌と大原真人今城の関係……町方　和夫
狛諸成の万葉考述作と注釈書
—仙覚抄・代匠記について—……河野　頼人
類聚歌林……高野　正美
霊異記引用経典の考察……露木　悟義

5号（昭和四十年十一月三十日発行）

家持の死……川口　常孝
出雲神話圏とカミムスビの神……倉塚　曄子
今村楽講説書入本『古万葉』について……鴻巣　隼雄
枕詞論Ⅰ……近藤　信義
大倭と山背—一つの素描—……杉崎　重遠
人麿短歌と古代伝説……都倉　義孝
東歌試論……渡部　和雄